

## わが国におけるディアコニッセによる 女性保護の為の福祉活動

— ベテスタ奉仕女“母の家”とかにた婦人の村の取り組み —

広島文化学園大学看護学部

佐々木秀美, 加藤 重子, 岡田 京子  
永石嘉代子, 棚田 芳彦

**要約** 本論は、ベテスタ奉仕女“母の家”と“かにた婦人の村”が実践した“売春防止法”成立後の売春婦たちの保護・更生を目指した取り組みについて、その創立者である深津文雄の生涯と思想を検証、その思想におけるキリスト教的愛の精神と、その精神から実践した女性保護活動について論じたものである。深津の生涯の探求は底辺の点の発見であり、その発見の中で、これ以上落ちるところはないところまで落ちた女性達の更生に身を捧げた一生であった。収容された女性達は生涯克服できないほどの傷を負い、何らかの意味で知・情・意に障害を持っていた。それゆえ女性達は、苦情、脱走、拒食、暴力、自殺未遂、発狂など気の狂いそうな状況を呈し、職員も入所者も相互に疲れ果てるという状況であったが、深津の思想に賛同したベテスタ奉仕女“母の家”のディアコニッセや多くの者達の共同と忍耐と継続性がある入所者達の心の安寧をもたらす活動であった。それは、キリスト教の教えに基づいて、疲れた人に休息を与えて、枯渇している人に水を与え、立ち上がるまで待つことによって女性達に忘れかけた愛の精神を呼び戻した結果であると考えられる。

**キーワード**：深津文雄，ベテスタ奉仕女“母の家”，かにた婦人の村

### ■ はじめに

わが国におけるディアコニッセによるもう一つの福祉活動、それは女性保護の為の活動である。“かにた婦人の村”と命名されたその女性保護の為の施設は、貧困にあえぐ家族の為に、自身を犠牲に、あるいはやむなくしてその身を売った哀れな女性達を収容した。それは、わが国における“売春防止法”成立とその周辺施策の不備を補完する活動である。“かにた婦人の村”はベテスタ奉仕女“母の家”というディアコニッセ達によって運営された。ベテスタ奉仕女“母の家”は、キリスト教牧師深津文雄(1909-2000)とドイツヴッパータール(Wuppertal)にあるディアコニッセン・ムッターハウス・ベテスタから“愛の泉”に派遣された2名のディアコニッセ達とその活動に賛同した日本のディアコニッセ達によって運営された。“愛の泉”という施設は、1945年(昭和20年)に設立された戦災孤児の養育の為のキリスト教系施設である。

ドイツのベテスタ奉仕女“母の家”は、テオドール・フリードナー牧師(Pastor Theodor Fliedner 1800-1864)が、1933年(天保4年)に設立したカイゼルスヴェルト学園のディアコニッセ“母の家”の下部組織でもある。既に筆者が『ドイツにおけるディアコニッセ養成がナイチンゲールに与えた影響について』<sup>1)</sup>で報告したように、ドイツにおけるディアコニッセ養成は、“母の家”方式であり、ドイツの看護教育方法としても特徴的である。看護教育の創始者フローレンス・ナイチンゲール(Florence Nightingale 1820-1910)も、人生の初期にドイツのカイゼルスヴェルト学園でディアコニッセ養成を短期間ではあるが、体験し、学び、看護教育草創に多大な影響を受けた。

ささき ひでみ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

フリードナー牧師は、エリザベス・フライ夫人 (Elizabeth Fry 1780-1845) が、英国で貧しい囚人の処遇改善の為の活動に影響を受け、1826年 (文政9年)、赴任先のデュッセルドルフのカイゼルスヴェルトにドイツではじめて刑務所規律を改善するための協会を設立した。続けて、1833年 (天保4年) に、みすぼらしくて粗末な教護院 (Asylum) を設立、被拘禁者の生活条件の改善に努めた。その後、病院とディアコニッセの“母の家”、師範学校、孤児院そして幼児学校を次々に付設し、ディアコニッセと呼ばれる看護師や教育者として女性達を訓練する場になった。訓練を終了したディアコニス達は、カイゼルスヴェルト学園“母の家”を拠点として求められる場所へ出向し、社会貢献した。その活動は日本に導入された。

筆者の『わが国におけるドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成の歴史』<sup>2)</sup>で報告したように、浜松聖隷十字の園は、同じくドイツから派遣されたディアコニッセ達によって、独自にディアコニッセ養成を行い、見捨てられた結核患者や高齢者などの保護にあたった。その活動は保健・福祉・教育の協働として現在に至るまで社会貢献活動を行っている。

他方、深津牧師によるその活動は底辺の点を探すという最も、下層であえぐ困窮者にその視点が注がれた。1954年 (昭和29年) に東京大泉にベテスタ奉仕女“母の家”を設立、自ら館長となった。彼は、ドイツにおけるディアコニッセを日本語で“奉仕女”とし、その指導育成に乗り出した。1956年 (昭和31年) に“売春防止法”が成立すると、社会から隔離した生活を行っていた売春婦たちの救済にあたった。“売春防止法”は、売春を禁止する法律であるが、女性達のみが罰せられるという不平等に立脚していた。問題は、法律にしたがって売春をやめた場合、今まで、その職に従事する以外、生活の糧のない女性達にとって生存するための保障が何もなかったことである。これは福祉の問題である。一般社会において国民の生活を維持・発展させていくための制度として基本的には、社会保障・公衆衛生・医療・教育などの一般施策を整備・充実させていくことが必要になる。地域福祉の考えは人々の幸福追求権、自由と平等思想に立脚しており、男女の別なく人間が生まれながらに有している人権思想である。福祉の考えが人権思想に基づくものであり、個人の自由・平等・健康・幸福の追求にあるとしたら、人々が暮らす日常生活においてこれが実現されなければならない。とりわけ、公共の福祉に貢献すべき看護師にとって、生活の前提条件である健康の維持・増進・回復のためのケアは重要な課題である。患者は、単に物質的な存在ではなく、社会的人として個々の患者の背景には、生活上の問題を抱え、それによって悩み・苦しむ、あるいは適切な医療をうけられないでいる場合もある。そこで、本論では、わが国におけるドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成の歴史とその活動の第二報として、ベテスタ奉仕女“母の家”の創立者である深津牧師の生涯と思想を検証、“かいた婦人の村”の女性保護活動について論じる。

## ■ 深津文雄の生涯とその思想

深津牧師の生涯と思想については、ベテスタ奉仕女“母の家”と“かいた婦人の村”から提供された資料や文書、『ぼくの自画像』<sup>3)</sup>、『いと小さく貧しき者に』<sup>4)</sup>、『かいた物語』<sup>5)</sup>、『かいた婦人の村創立50周年記念誌』<sup>6)</sup>、『かいた便り』<sup>7)</sup>など深津自身が執筆した著作などを参考にした。

深津は父親の影響を受けて牧師になったが、その前半の生涯を見るとどちらかと言えば反骨精神の方が強い。著作『ぼくの自画像』によれば、深津は1909年 (明治42年)、牧師である深津基一 (1874-1920) と桑野タカの次男として敦賀で生まれた。1930年 (昭和5年)、明治学院神学予科へ入学した。ここでは、後に深津牧師の事業に協力したオーガスト・カール・ライシャワー (August Karl Reischauer 1879-1971) が教授として就任していた。カールは、戦後、駐日大使であったエドウィン・ライシャワー (Edwin Oldfather Reischauer 1910-1990) の父親である。彼は、明治学院高等部長として2年間務めた後、1918年 (大正7年)、東京女子大学を設立して代表になった。1919年 (大正8年) に明治学院神学部教授に就任、1920年 (大正9年) から女子学院院長を兼任し、1927年 (昭和2年) まで務めた。女子学院は、1890年 (明治23年) に桜井女学校と新栄女学校が合併して校名を女子学院として発足したものである。同校は、私立学校として本科5年間の教育の後に高等科を設置し、その高等科が母体となって東京女子大学が設置されたという経緯がある。

桜井女学校は、わが国におけるナイチンゲール方式による看護教育機関の先駆けである。同校は、1876年（明治9年）、桜井ちか（1855-1928）によって東京・麹町に設立された。その理念はキリスト教的主義によるものである。桜井女学校は当時のわが国が目指した良妻賢母主義教育とは異なり、キリスト教理念に根ざす人格の養成であり、自由自治の精神を重視、世のために正しい働きのできる女子の育成を基本方針とした。ちかはアメリカ長老教会の命をうけ来日したメアリー・ツルー女史（Mary True 1840-1895）の協力を得て、1879年（明治12年）には高等小学科、1880年（明治13年）、幼稚園を設立した。桜井女学校付属看護婦養成所の設立は、ちかよりもツルー女史のほうが積極的であり、彼女の意思で始まったものと言えるであろう。その直接的な動機としては、先に宣教目的で来日していたジョン・バラ夫人（Mrs John Craig Ballagh）が、病気となった際、看護師のいない不便さを見にしみて知り、看護教育の必要性を感じながら世界した為、その意志をツルー女史が引き継いだものである<sup>8)</sup>。

東京女子大学は、1910年（明治43年）に開催されたキリスト教世界宣教大会での決議に基づいて、北米のプロテスタント諸教派による援助を受けて開設されたものである。1920年（大正9年）に日本聾話学校が設立され、カールの妻ヘレン・アウグスタ・ライシャワー（Helen Augusta Reischauer）が初代校長になった。1933年（昭和8年）、日本神学校を卒業した深津は、1935年（昭和10年）に東京板橋区に移住し、茂呂塾日曜学校を開設、集まった子供たちとの関りを通して貧乏ではあったが最も幸せな日々を送った。この頃の深津牧師は、社会事業には関心がなく、ましてや、盲人との触れ合いなど、できれば避けて通りたいと考えていた。しかし、運命の糸に手繰り寄せられるかのように深津牧師は、盲女子高等学園に関わるようになった。1937年（昭和12年）、日本の社会事業家、岩橋武夫（1898-1954）の要請を受け、ヘレン・ケラー（Helen Adams Keller 1880-1968）が来日した。岩橋は早稲田大学在学中に失明、その後、エジンバラ大学に留学、学位を取得した後、関西学院大学で教育職に就いていた人物である。岩橋は活動の一環として盲人の為のライトハウス館を設立、点字など盲人の社会活動を支援していた。深津牧師は、盲学校との関係から東京青山でケラーの講演会を計画した。講演時にケラーが「これからの文明は、強いものが弱いものの手を取って二歩いくところ一歩すすんでも、それはあともどりのない前進になるでしょう。」<sup>9)</sup>と語った言葉を聞いた。深津牧師は、その言葉に深く感動し、それまでの自身の利己主義的な考えを恥じて、生涯弱いものの方を見方になろうと誓った。

1938年（昭和13年）、深津牧師は茂呂塾幼稚園園長になった。その落成式には、ケラーの講演会でも協力してくれたカールも参加した。その後、1941年（昭和16年）に深津牧師は、日本基督教団上富坂教会の牧師として赴任した。そこで、村山春子（1915-1998）と貧しい結婚式を挙げた。1950年（昭和25年）からNHKラジオチャーターで『旧約文学』についての解説を16回放送、1951年（昭和26年）からは『聖書の真髄』を12回放送した。この放送を聞いていたと感動した眞山知恵子（1931- ）は、深津牧師のもとを訪れ、ベテスタ奉仕女“母の家”に志願した。志願前の眞山は、職人の食事を世話する職についていた。非常に貧しいと感じていたが、ベテスタ奉仕女“母の家”での生活は、それ以上にもっと貧しい食生活であったと述べる。1954年（昭和29年）、深津は三笠宮崇仁親王殿下（1915-2016）の提唱していた学術団体である“オリент学会”を創立した。深津はこの創設を通して三笠宮殿下と出あった。三笠宮殿下は、東京大学文学部（旧制東京帝国大学）の研究生として歴史学を学修し、特にオリент史に造詣が深く初代会長に就任した。

そして、同年5月に深津牧師は、ベテスタ奉仕女“母の家”を創立した。自ら館長となり、奉仕女の指導育成に乗り出した。この年、志願してきた奉仕女4名の着衣式を行った。1956年（昭和31年）10月にベテスタ奉仕女“母の家”は社会福祉法人として認可された。奉仕女は、皆がおいていった重荷を背負うべきであると深津牧師は考えた。そして、日本独自の問題を奉仕女独自の問題として解決する方法があるとしたら、それは売春の問題ではないか。深津牧師の頭には、“いと小さきものひとりに、なおさりしはわれに、なほざりしなり”というマタイ福音書にある言葉がぼんやりと浮かんだ。そこには、「貧困の問題と不道德の問題とに直面」<sup>10)</sup>する問題として売春婦の問題があった。男性優位社会の中で福祉の問題から遠く閉ざされた女性達の問題が売春婦の問題であった。深津牧師の中に「人間、地上に生を享ける限り、無用なものは存在しないのだ。それが無用・無意識にみえるとしたら、それこそ、創造主への反逆だ。」<sup>11)</sup>と彼は考えた。

偶然、読んだ新聞紙上に久布白オチミ（1882-1972）の名前を発見した。彼女は、戦前・戦後を通して活躍している女性解放運動家の一人である。すぐさま、久布白の活動拠点である日本キリスト教婦人矯風会館を訪ね、協力を求めた。彼女達は、“売春防止法”成立後の汚職についての報告会を開いたりしていたからである。久布白たちの協力を得て東京都に相談した結果、女性達の婦人保護施設設立に対して計画書を出すよう命じられ、大泉の地にその施設を建設する計画書を提出した。度重なる東京都との交渉の末、1958年（昭和33年）に、売春婦等、社会復帰が困難な女性を救済する目的で婦人保護施設、いずみ寮を開設した。いずみ寮という施設名は、その設置場所である東京大泉の“大”を省いていずみ寮としたものである。最初の入居者は東京都から50名であり、精神的・知的障害が強く社会復帰ができていない女性達であった。深津は生活する場の提供を行えば、彼女たちは助け合って生きることができると考えた。そして、「親身に世話すれば親身に慕ってくれる。信頼を借しこせば、何倍かにして返してくれる。無能といわれても生きているのだから、何かできる。それが見つかった時は、天にのぼるほど嬉しい。何事も目を輝かして、別人のように、自信をもちはじめ。」<sup>12)</sup>との考えが深津牧師にはあった。

売春婦の更生には、「食べたいだけ食べさせ、寝たいだけ寝かせればいつかは起き上がって何かするに違いない。」<sup>13)</sup>という深津牧師の考えは、“売春防止法”制定35周年記念式典におけるシンポジストとして招かれた時の『ぼくの中の心中』という講演内容に表れている。「人間とは思えないほど疲れ果てている人々を、よく休ませ、まずいものでも腹一杯食べさせ、なにか仕事がしたいというまで、何か月でも待つという言葉にも良く表れている。“売春防止法”施行の4月には、都道府県ごとに婦人保護施設が開設されたが、その運営についてはいずれの施設も困難を極めていた。いずみ寮を始めて直ぐに分かったことは、彼女たちは重いから落ちたのだということである。ひとりの人間が、苦しみの中に身を沈めるからには、ただ貧しいだけではあるまい、それに先立つ障害があるのではないか…。入所させてわかったことは、彼女たちの大部分は、何らかの意味で知・情・意に障害を持っていたことである。

深津牧師は、設置認可が下りたこの施設に看護師の資格のある奉仕女と医師を配置した。よそで引き受け手のない人を、みんなどうぞと言って始まったいずみ寮の生活は、奉仕女たちが共に暮らすことから始まった。入所者達は、しだいに寮内外の家事や園芸などを分担することができるようになり、仕事らしい仕事がしたいと言い始め、洋裁、ビニール紐のバッグ作り、ガリ版印刷などが始められた。また、希望に応じて、料理、国語、英語に加えて聖書の勉強などの夜間大学も始まった。1958年（昭和33年）の降誕祭には、9人が洗礼を受けた。そして、カマボコ兵舎をもらって、パン屋を始め、1960年（昭和35年）の夏には、コロニー建設への熱意を分かちあう学生たちのワークキャンプでブロック積み的小舎が狭い敷地内に建てられた。鶏舎、豚舎、印刷部、廃品部、洗濯部、製菓部が次々と始められた。彼女たちは、これを“小コロニー”と呼んだ。

そして、10年も経過すると入所者の高齢化が目立った。同時に、日本社会全般に受け皿もなく、社会に出て、またすぐに転落するという社会復帰の難しい人々が、肩寄せ合って生きていくためのコロニーの必要性が論じられ始めた。住みなれたこの村を“終の栖”にしてやりたいと考えた深津牧師は、日本のラジオパーソナリティであり、評論家の秋山ちえこ（1917-2016）に手紙を送り、支援を求めた。秋山はチャリティバザーや講演会などで支援を行った。いずみ寮の実践は広く報道され、1956年（昭和31年）から売春対策審議委員であった衆議院議員の松原一彦（1881-1966）は、どこかにそういう所を作らなければならない、宗教家でなければ、そういうことはできないと考え、コロニーの実現を強く押し進めた。そして、深津牧師は、厚生大臣の堀木鎌三（1898-1974）から呼び出しを受け、具体的なコロニー案を出すよう求められた。結果、1965年（昭和40年）日本で唯一の一生涯過ごせるコロニー、“かにた婦人の村”を千葉県館山市に創設することができたのである。その施設は、1956年（昭和31年）成立の“売春防止法”に基づき、売春や性暴力で性的に傷ついた女性、なかでも短期的な支援では回復が困難な、知的障害や精神障害のある女性が長期的に入所する施設である。「このトリガラといわれる一むしりとれるだけ良いところを取ってしまった後の残骸一ひどい傾斜地一万坪たらずに、100人もの難ケースを全国から抱え込んで必死に生き抜いた12年間」<sup>14)</sup>と述懐する深津は、16人で一軒一家族と見立ててそこに1名ずつの寮母を配して生活指導にあたらせた。“かにた婦人の村”の扁額には、深津牧師の書が掲げられている。「かにたとはそこを流れる小さな川の名前でした。赤手蟹がチョロチョロとはう田甫のいみでしょうか、そ

のほとりに捨てられたいとも幸うすき女性 百人の共に住む村の名称になりました」という言葉である。

“かにた婦人の村”の運営が軌道に乗り始めた頃、深津牧師は、村の納骨室つき礼拝堂で使うオルガンを求めて、世界的オルガン建造家の辻宏（1933-2005）と共に、ヨーロッパを旅したのは1980年（昭和55年）の夏のことである。辻は1976年（昭和51年）に岐阜県加茂郡白川町に転居して辻オルガンとしてオルガン制作を行っていた。彼は、美しい音を求め、その生涯を信仰とパイプオルガン制作に注いでいた。二人はイタリアのピストイア市立マベリーニ音楽院で、1762年（宝暦12年）にドミニコ・ジェンティーリ（Domenico Gentili）というイタリアのオルガン制作者の中全音律のオルガンに出会い、その“澄んだ柔らかい天上の和声”に心を奪われた。そして1982年（昭和57年）、イタリアのジェンティーリオオルガンの忠実な複製が、岐阜の山奥の峠の樅の木で造られた。辻によって複製されたその愛らしいイタリアオルガンは、“かにた婦人の村”の人たちが、ブロックをひとつひとつ積んで建てた村の礼拝堂の正面に納まり、日曜日の礼拝はもちろん、復活祭や降誕祭には高らかにうたい、遺骨の引き取り手のない幸薄い女性たちの告別式にも、寄り添ってくれている。

1989年（平成元年）、深津牧師は、“かにた婦人の村”施設長を退任、2000年（平成12年）、“コロニー”の一室で永眠した。その生涯は底辺の点の発見であり、その発見の中で、これ以上落ちるところはないところまで落ちた女性達の更生に捧げた一生であった。その思想にはキリスト教牧師として、みんなが見落としている底点志向であり、疲れた人に休息を与えて、枯渇している人に水を与え、忘れかけた愛の精神を充足させるという精神に満ち溢れていた。

## ■ ベテスタ奉仕女 “母の家”

1954年（昭和29年）に設立されたベテスタ奉仕女 “母の家”は、一般民家と見間違ふほどの簡素なつくりである（右図）。ベテスタという名前の由来は、ドイツの地方都市、ヴッパータール（Wuppertal）にあるディアコニッセン・ムッターハウス・ベテスタから“愛の泉”に派遣されていた2名のドイツ人ディアコニッセの所属母体の名称である。彼女たちの協力により日本に設立された“母の家”の名称もベテスタと名付けられた。



図 筆者撮影

ドイツ人ディアコニッセの一人、Sr. ハンナ・レー

ヘフェルト（Sr. Hannah Lehefeld 1927- 不明）は、1952年（昭和27年）に来日、Sr. エリサベット・フォーリンガー（Sr. Elisabet Föringer 1926-2016）は、1953年（昭和28年）に来日していた。ヴッパータールの行政管区はデュッセルドルフであり、ディアコニッセ養成の聖域カイゼルスヴェルトと同じライン川に近い。深津牧師のディアコニッセ養成とその活動に賛同した天羽道子（1926- ）は、満州の女学校を卒業、帰国後キリスト者の一人として何か社会に役立つことがしたいと考えていた。そうした時期、深津牧師からドイツのディアコニッセについて聞く機会があった。深津牧師からディアコニッセには看護の資格があった方が良いのとの提案があり、1946年（昭和21年）、聖路可看護専門学校に入学した。その頃、日本ではGHQ（General Headquarters の略 連合軍最高司令官総司令部）による看護教育改革が推進されていた。日本の看護の教育の質が著しく低いと考えた彼らは、聖路可看護専門学校と日本赤十字看護専門学校とを統合し、全国の看護師の養成の先駆けとなる東京模範学院（Tokyo Demonstration School of Nursing）を設立した。天羽は、聖路加看護専門学校経由の東京模範学院での3年間の教育終了後、看護師の資格を得た。1954年（昭和29年）、ベテスタ奉仕女 “母の家”が発足し、深津牧師は館長に就任した。1950年（昭和25年）、ベテスタ “母の家”のディアコニッセとしての着衣式が深津によってなされた。二人のドイツ人ディアコニッセたちは指導者として、日本のディアコニッセ養成に大きく貢献した。

ベテスタ奉仕女 “母の家”でディアコニッセとしての基礎訓練・生活訓練は、2名のドイツ人ディア

コニッセによってなされた。その訓練の主たる内容は、“沈黙”“完全”“服従”“共産”であり、『ディアコニ』<sup>15-19</sup>に記述されている。それは、生活共同体としての心得や姿勢、あるいは掃除や家事などのトレーニングも含まれた。その他、宗教的教育は深津牧師によってなされた。上富坂から始まった奉仕女運動ではあったが、無からの出発で母体となる“母の家”（建物）もなく、“愛の泉”のドイツ宣教師であり、東洋英和で保育を教えていたゲルトルート・キュックリヒ（Gertrud Elizabeth Kücklich 1897-1976）の好意で、施設内に新築された診療所を拝借しての出発であった。キュックリヒは、アメリカの本部からドイツに伝道されていたアメリカの福音教会の宣教師であり、1922年（大正11年）に日本に派遣された。彼女は、小石川福音教会に併設されていた孤児収容施設愛泉寮や保母養成所で奉仕し、東京の下町で、向島教会（現在の聖和教会）の設立やその後の伝道を助けていた。

レーヘフェルトとフォーリンガー両者ともにベテスダの機関紙『ディアコニ』に教会奉仕の歴史やキリストの愛をはこんだ人々と題してディアコニッセ養成に関わったキリスト教会の牧師やディアコニッセ等の重要な人物描写をしている。実際、1850年（嘉永3年）にナイチンゲールが、カイザルスベルト学園に学んだ頃には、ゲルトルート・ライヒャルト（Gertrud Reichardt 1788-1869）が、教育に従事していた。彼女はフリードナー牧師がディアコニッセ養成を開始した初期の時点からの協力者である。ナイチンゲールの観察によれば、高齢になったライヒャルトは、体力の衰えのために、身体を使う介助は十分にできないが、世話は献身的であり、極めて貴重な働きをしたので彼女は、男性の患者からは母とみなされていた。フォーリンガーは、ライヒャルトについて、見習い生や若年のディアコニッセに指示を与えたり、助言をしたりと、大きな貢献をし、どんな仕事でも嫌がらず静かで霊的な態度と病気を看護する技能とは、真の奉仕女として全ての者の模範となっていた<sup>20</sup>と書いた。

勿論、ドイツでディアコニッセ養成を開始したフリードナー牧師の業績は連載で記述されている。1836年（天保7年）ドイツでフリードナー牧師によって再興されたプロテスタントの社会救済に奉仕する女性の事を彼はディアコニッセと命名した。その起こりは、イエスが、神の福音を説くと共に、苦しんでいる人々を助けるために弟子たちを使わされていたことに端を発し、フリードナー牧師によって再興されたものである。今日ドイツをはじめ世界中に国によって形態の違いはあるが、数万人が奉仕女として働いている<sup>21</sup>。

深津牧師は1年の基礎課程を終えたディアコニッセ養成の残りの3年間をどのようにするべきか悩んだ。浜松聖隷のディアコニー学校は4年課程であり、1年間は、“母の家”で聖書、ディアコニッセとしての精神を学び、家事・家政一般の原理学習と実習、そして、2・3年目は、既に同施設内に設立した聖隷准看護婦養成所に入學、准看護婦の免許を取得する。准看護婦の免許取得者は、1年間の聖隷病院勤務での就労、それ以外の生徒は6か月を病院に、残りの6か月を、“母の家”の指示する分野で奉仕活動の実習を行う。この4年間の全課程を修了した者に、ディアコニー学校の卒業証書を授与するというシステムであった。ところが、ベテスダ奉仕女“母の家”には、浜松聖隷のような看護師の資格取得の為の養成所は存在しない。天羽が卒業した聖路加看護専門学校からは、その後の入學を断られ、当時の看護学校は病院附属が多く、看護師の資格を取得した者は、その病院に縛られることが多かった。奉仕女は看護師の資格保有者が望ましいと考えたが、その道は極めて困難であった。深津牧師は、ドイツのカイゼルスヴェルト学園におけるディアコニッセ養成について丹念に調査した結果、ディアコニッセ全員が看護師の資格保有者ではないことを発見した。そこで深津牧師は、ベテスダ奉仕女“母の家”のディアコニッセすべてが看護師資格保有者でなくても良いとの結論に至った。そして、ディアコニッセを日本語名で奉仕女とした。

1955年（昭和30年）、ベテスダ奉仕女“母の家”の理事会が発足した。理事長は、アメリカの牧師のP・S・メーヤー（P・S・Mayer 1884-1962）が就任した。彼は、1909年（明治42年）から福音教会の外国伝道会から派遣され来日したアメリカの牧師であり、隠退まで日本福音同胞教会日本宣教師団の統理を務め、日本聾話学校財務理事、日本聖書神学校理事長、日本キリスト教協議会副総主事などを歴任した人物である。理事にキュックリヒ、他に日本基督教団牧師であり神学者の小崎道雄（1888-1973）、キリスト教社会運動家、社会改良家の賀川豊彦（1888-1960）、初の女性代議士榊原千代（1898-1987）、池田春江である。キュックリヒは、福音教会の宣教師として、アメリカの本部から日本に派遣され、小石川福

音教会に併設されていた孤児収容施設愛泉寮や保母養成所で奉仕していたが、第二次世界大戦中も帰国せず、日本に留まり、戦後は乳児院や高齢者福祉施設の設立に尽力していた。1945年（昭和20年）、埼玉県加須市の岡安ゴムの寮の敷地内に、後の社会福祉法人“愛の泉”となる孤児院を開設、さらに、愛泉寮教会（後の日本基督教団愛泉教会）を設立、社会福祉法人愛の泉の理事長、キリスト教保育連盟副理事長などを歴任、保育者養成にも力を尽くし、東洋英和女学院短期大学保育科教授、草苑保育専門学校講師、和泉短期大学教授なども歴任した人物である。

同年、秋にはドイツ・ベテスダの奉仕女長のエミリオ・シュヴォワインスベルク（Petesda Mutters Hausdienstleiter Emilio Schwainsberg）が、ベテスダ奉仕女“母の家”を激励する目的で来日した。深津牧師は、“売春防止法”ができて15万人の白奴達の更生に挺身しようとの決意を彼女に話したが、エミリオ奉仕女長は、売春婦問題の解決はドイツでも困難を極めていると難色を示した。深津牧師は、彼女について「英知と品格を備えていた。」<sup>22)</sup>と書いている。エミリオ奉仕女長は、「日本の奉仕女がまもり導かれるように。十分な健康が与えられるように」<sup>23)</sup>と帰国に際して最後の言葉を残した。看護師の有資格者ばかりではなかったが、訓練期間を終えた奉仕女は、愛泉乳児院、双葉修道園、茂呂塾保育園、精神薄弱施設など、必要とされる場所へ遣わされた。そして、ドイツの組織母体とも連携、1954年（昭和29年）に設立された浜松ディアコニッセ“母の家”とも交流をもった。

## ■ “かにた婦人の村”における女性保護の為の活動

“かにた婦人の村”は1965年（昭和40年）、千葉県館山市に設立された。1956年（昭和31年）成立の“売春防止法”に基づき、売春や性暴力で性的に傷ついた女性、なかでも短期的な支援では回復が困難な、知的障害や精神障害のある女性が長期的に入所する施設である。

その村は門もない、堀もない、テレビもない禁酒・禁煙の施設である。それは、東京いずみ寮での体験を持つ深津牧師の考えによる。入寮者の無断退寮や脱走者などへの対応策として脱走防止策を練っていた深津牧師は考えた末に、門もない、堀もない施設をつくることであった。彼は、高い堀、鍵のかかった門、監視の効く構造、厳重な罰則のある施設を裏門から観察した結果、同じような施設であったら、自身も逃げ出したくなるだろうと考えたからである。不信をもって向かえば、不信でもって答える、憎悪をもって打てば憎悪をもって打ち返すという、果てしない闘争と破壊の中に、これから設置する施設を巻き込みたくないと考えた。

『かにた婦人の村創立50周年記念誌』<sup>24)</sup>には、設立年の1954年（昭和29年）から2015年（平成27年）までの入所者の推移や活動の記録が掲載されている。記念誌の最初のページには、深津牧師の書、「かにたとはそこを流れる小さな川の名前でした。赤手蟹がチョロチョロとはう田甫のいみでしょうか、そのほとりに捨てられたいとも幸うすき女性 百人の共に住む村の名称になりました」という言葉が挿入されている。かにた川のほとりに捨てられたいとも幸うすき女性達という深津の言葉には、入居した女性達への憐みや憐憫の情が込められている。

開設当初の入所者は、100名定員で、17の都道府県から56名、東京都からの入所者が最も多いが、北は北海道から南は佐賀県まで幅広い地域からの入所である。深津牧師が、トリガラと表現したひどい傾斜地に設立した“かにた婦人の村”は、難ケースを全国から抱え込んだ。いちばん困る人からどうぞと言ったものの、一刻も早く引き受けたため、気の狂いそうな事故続出であった。『かにた物語』には入所者たちが引き起こす様々な問題行動とその対応に四苦・八苦している施設の職員の様子が描写されている。苦情、脱走、拒食、暴力、自殺未遂、発狂などである。そのころは全職員が住み込みで逃げる場所もない。職員も入所者も、まるで伸びきったゴムのように疲れ果てていた。深津牧師は、16人を一軒一家族と見立てて、そこに1名ずつの寮母を配して生活指導にあたらせた。

次年度の入所者は87名、50周年にあたる2015年（平成27年）までの全入所者は188名であり、他の施設への移管は42名、死亡76名、年代別では20代から50代が12名、60代19名、70代24名、80代13名、90代が2名で高齢化が進み、入所期間は40年以上が34名、30～39年が10名と長期化している。そして、2015年（平成27年）の、入所者総数は70名、20代から90代と幅広い。

開設当時から、入居者には自立支援も含め、農園では米の栽培、他野菜、果物、酪農も行い、パンやケーキ等の手作りも行う。全国から不用品が送られることから、手作りの手芸品販売等のバザーも開催した。リズムを失っていた生活の中で、日曜日は食堂を閉め、土曜日は大掃除と遊戯会などの希望が出たり、華道でも政治でも勉強しようというグループが生まれたりした。もし、このような平和な心情が彼女たちの生活の大半を占めうるならそれでも問題行動が起こるだろうか？と深津牧師は投げかける。深津牧師はお金の問題が彼女たちの心身をむしばむと考えた。「貨幣を発明したほどの人間が、いつしか貨幣の奴隷になってしまって、貨幣のためなら何でもするが、貨幣にならねば何もしない。その極限が売春ということ、そこまで落ちてしまった人間をもとの姿に引き戻す方法は一つしかない—彼女たちに貨幣そのものを忘れさせることである。」<sup>25)</sup>そこで、深津牧師は、人間には、生まれてから死ぬまで、何かしたいという創造欲があって、それが伸びたいように伸びられないばかりに「1、強いられる労働に対する嫌悪（怠惰）、2、人間らしい労働に対する未練（趣味）、3、果実なき労働への補償的逸脱（娯楽）、4、破壊的労働への非良心的沈黙（享楽）と限りなく落ちこんでゆく—」<sup>26)</sup>と考えた。人間の労働の価値を貨幣に換算したばかりに、本末顛倒して不本意な労働で貨幣を得なければ、それを失いながら快楽を得ることができないという図式を作り上げてしまったと述べる。

そうした問題行動の多い入所者に効果的であったのは絵画療法であった。ある入所者は入って来るなり、くしゃくしゃするから今日は、うんと描くと言って、14枚の傑作を残した。青のチューリップに青の背景からはじまって、畑・木・落葉・石、凡て力強い太い線描き。窓、黒一色の冬の梢。快い空間のリズム。無心に、思うところを描いていく。全く既成概念に汚されていない原始美術である。それにつられて、他の12名も黙々と絵筆をうごかす。1969年（昭和44年）から、明星大学の研究チームによる心理学的なアプローチと音楽療法が開始された。その他、自家製パン食の開始、農園や陶芸等、制作活動も行った。学びたい者に対しては、水曜学校を開校した。開校当時は、午前・午後・夜の部があり、国語、数学、童話、政治、絵、管弦楽、自由学級、手芸、ワンダーフォーゲル、茶道、料理、琴、卓球、コーラス。みんな、いそいそと村の中を行き交った。

そして、創設から26年を回顧した深津は、あれほど手こずった同性愛や攻撃的行動が消え、施設内に秩序と平和が、訪れたと感じた。“かいた婦人の村”の作業班は、そこに集まって来た人たちによって、その時々につくり出されてきた。どんな小さいことでもいい、できることを見つけてやりはじめようという気風が生まれ、寮内の掃除、食堂の皿洗い、山の開墾、道路作りと、みな、それぞれに合った仕事を探して動き出した。村人は、いろいろな作業の中から自分のやりたいものを選んで参加している。人間関係が難しい者に合う作業がなければ、1人のために新しい作業を用意することも考えた。

入所者たちの自立的精神が始まった「編物、縫物、農耕、園芸、家事、製陶、製菓、洗濯、木工、牧畜、購買、看護とそのどれを取ってみても彼女たちの発想にもとづかぬものはなく、用地の買収から建物の建設、機材の購入や据付けまで、職員より寮生の方が熱心に推し進めてきた。」<sup>27)</sup>かいた創立13年目、彼女たちの生産価値が消費を上回った。開墾された果樹園には、温州みかん、あんず、梅、栗、ネーブル、キウイなど13種類の果物が植えられた。すでに甘夏みかんは、1967年（昭和42年）から134本が植えられた。現在では、びわ、梅、ブルーベリー、柿、栗、かぼす、柚子、キウイ、温州みかん、はっさく、きんかん、ネーブル、紅甘夏、ポンカン、甘夏みかん等が村の食卓をさわやかに彩っている。

近年では、“DV防止法”や“ストーカー規制法”に基づいて、女性を保護するケースもある。現在、養護棟以外の村人42名の平均年齢は、62歳（25～79歳）。高齢者にはゆったりできるように配慮し、それぞれの作業班で、午後の時間は好きなことをして過ごしたり、早めに入浴したりと工夫している。彼女たちの現在の作業内容は、調理の手伝い、食堂の掃除と配膳手伝い、風呂場の掃除、リネン類の洗濯、パン焼きとジャム、お菓子作り、野菜・米・果物栽培、ハーブティー作り、石けん作り、編物・織物、陶芸、使用済切手の整理、外掃除・看護棟の掃除などの手伝いなど多種・多様である。

“かいた婦人の村”では、弱い人々に下請け作業をさせてはいけない。まず、職員が目が輝いていて、創る喜びを味わえるようなことを。子供が無心に遊ぶようにさせることが—かいたの労働哲学—である。まず職員が目が輝かせて、自分のしたいことをする。それに村人を巻き込んでいく、という哲学が共有されてきた。名誉村長の天羽は、かいたに来たときに深津施設長に「何をしたい？」と尋ねられ



たという。コロニーができたらずひ陶芸をやるといいとやって来た職員は、土地を買うところから始め、労働奉仕の青年たちの力を借りて陶芸作業棟を建て上げ、陶芸を始めた。次いで製菓作業棟も完成し、やっとなパン焼きが始められた。山から木を切り出して、作業棟を建てた初期の木工班の職員は、搾取も差別もない牧歌的な仕事と記録している。必要に応じて作られた作業班には、現在は既に閉じられたものもある。

深津牧師の意思を継いで施設長に就任した天羽は、2013年（平成15年）まで、婦人保護長期入所施設「かにた婦人の村」で施設長を務め、現在は名誉村長である。天羽は、「基本的に入所者と職員という立場を超えて、すべての人間平等の立場に立つ。故に同じ村人という考えをもち、すべての人を尊重する。その上で、一人ひとりが負っている痛みを共感しうる者でありたい。共に泣き、共に喜ぶ者でありたい。そして一人ひとりが、“生き生きと生きる”世界を共に創造したい。」<sup>28)</sup>と語り、施設長の五十嵐逸美氏は、「入所者の立場に立って彼女たちの話をまずじっくりと聴くこと。思いや希望、願いをそのまま受け止め、肯定し、叶えていく方法を一緒に考えます。そこに障壁があれば解決可能なことかどうかを伝え、難しい場合は迂回路や調整的な方法を提案し、説明し、納得していただきながら支援を提供できるように、努めなければならないと考えます。」<sup>29)</sup>と語っている。『かにた婦人の村50周年記念誌』に掲載された小さなコインが示す“慈悲の食卓”は、キリストがモデルを示した愛の実践の象徴である。

深津牧師の心に目覚めたのは“底点の発見”である。“慈悲の食卓”と同じく「飢える者、乾いている者、寄るべない者、裸の者、病弱なもの、獄にある者。では、その人々に何をなせばよいのでしょうか？キリストは応えます。一飢える者には食をあたえ、渴ける者には飲ませ、寄るべなき者をもてなし、裸なる者に着せ、病弱な者を看護し、獄舎にある者のところに行くように一と。」<sup>30)</sup>というキリストの教えである。“かにた婦人の村”における女性保護の活動こそが、深津のキリスト教的愛の実践である。その原点に“底辺の点の発見”が貧しく病みつかれたいと小さき者への限りない慈しみの心、奉仕の精神であったと考えられる。

## ■ 売春防止法成立と娼婦と呼ばれる女性達の歴史上の課題

牧師生活で「貧困の問題と不道德の問題」<sup>31)</sup>に直面した深津が目覚めた“底点の発見”は、最下層で苦しむ売春婦達に視点が注がれた。1956年（昭和31年）に成立した“売春防止法”は、ザル法とよばれる。その理由は、売春の売側のみには罰則があり、買う側にはない、つまりは、女性のみが罰せられるという不平等に立脚していた。自身の身体を提供してお金を得るという点では、男性がその筋肉を使って筋肉労働の汗から得られる貨幣と女性が自身の肉体を使ってお金を稼ぐのとは若干意味合いが違う。不幸を源泉としながら、快樂の世界に身を投じていく売春という生業を、女性の職業とは認めがたい。が、しかし、売春で生計を立てている者達は基本的に貧乏に由来する。そこには家族を助ける為の前借金があり、その後も、衣装代や化粧台など、すべてが本人持ちで決して消えない借金の為に身動きできない状態にある女性達だ。売春が防止されたことによってその法律は、保護の対象に女性達を置かなかつた。帰る家もない哀れな女性達である<sup>32)</sup>。

『日本女性史』<sup>33-37)</sup>によれば、1656年（明應2年）、江戸幕府は、遊郭と言われる売春宿を吉原等に集めた。いわゆる公娼制度の成立である。しかし、この遊郭は格式を重んじ、庶民は利用しがたく、一般庶民はふろ場などで遊戯にふけることもあり、風紀上の問題は深刻であった。1872年（明治5年）、明治政府は、太政官布告によって、芸娼妓解放令を発令したが、実効性に乏しく、1900年（明治33年）に“娼妓取締規則”を発令した<sup>38)</sup>。その規則は、娼妓稼業に関する取締法規である。主な内容は、満18歳以上の女性で、娼妓所在地所轄警察署に備える娼妓名簿に登録されたものでなければ娼妓稼業をなすことができない（1条、2条）。後は、警察への申請の仕方と同一戸籍内にある最近尊属親の承諾の必要について、娼妓名簿削除の申請等についてである。

1869年（明治2年）には、法学博士の津田真道（1829-1903）から、奴隷解放問題同様にお金で人身を売買することを禁ずるべきという提案がなされた。津田は、オランダで法学を学び、帰国後、明治政府に出仕した人物である。また、森有礼が設立した明六社に参画し、『明六雑誌』にも廢娼論を発表した。

明六社とは1873年（明治6年）に森有礼（1847-1889）が、福沢諭吉（1835-1901）、法学博士の加藤弘之（1836-1916）、東京大学教授の中村正直（1832-1891）・西周（1829-1897）らと結成した学術団体であり、『明六雑誌』を発刊して啓蒙思想の推進、迷信や因習に縛られない自由で合理的な精神を追求しようとした。西洋の法律を学んだ津田は、元老院議官を経て、衆議院議員・貴族院議員に当選、法学博士を授けられ男爵となった人物でもある。

1886年（明治19年）、キリスト教系組織である矯風会が設立された。矯風会の活動初期は禁酒禁煙運動、公娼制度の廃止運動（廃娼運動）、婦人参政権獲得運動に力を置いていた。1900年（明治33年）頃からは、救世軍中央婦人救済部と共に婦人ホーム、職業紹介、教育、人事相談、医療を行って、婦人を救済し正道に復帰せしめようとする活動を行った。救世軍は、1865年（慶応元年）にイギリスのメソジスト教会の牧師、ウィリアム・ブース（William Booth 1829-1912）によって、ロンドン東部の貧しい労働者階級に伝道するために設立された。救世軍は軍隊のような組織編成ではあったが、Not volunteer army, but Salvation army という啓示を示し、慈善的活動が主たる活動であり、その活動を世界的に拡大した。日本では1895年（明治28年）にブースの指令によって、エドワード・ライト（Edward Wright 1863-没年不詳）が上陸、その直後に入隊した山室軍平（1872-1940）は大規模な伝道活動を始めると同時に、生涯に渡り、社会福祉事業や公娼廃止運動（廃娼運動）に身を捧げた。こうした活動にも関わらず、男性優位社会であった日本の売春婦問題は、廃娼論と在娼論とが同時に展開されつつ継続し、結論には至らなかった。

戦後はGHQの要求によって1948年（昭和23年）から、国会で売春の処罰が議論されるようになった。1956年（昭和31年）から売春対策審議会が設置され、“売春防止法”が草案され、国会で審議された結果、同年5月に成立、1957年（昭和32年）から施行されることとなった。刑事罰などは1958年（昭和33年）から実行されることになった。いわゆる売女や遊女あるいは淫売女というのは、日本の歴史を語る上で様々な形でその営みがなされたが、売春をする者達のみが罰せられる法律であった。彼女たちは加害者ではなく、被害者であるということである。深津牧師は、人間とは思えないほど疲れ果てている人々を、よく休ませと書いている。彼女たちは、その職業ゆえに心身ともに擦り切れていたと考えた。そうした中でキリスト教牧師である深津と、その活動に賛同した者達が、また、その賛同の輪を広げて今に至っている。これは女性達の福祉を考えた取り組みである。

人間の生存に関わる生活上の問題は、単に生存の危機ということだけであれば人間の歴史上古い問題であるが、社会の生産力が極度に低ければ、自然利用の能力も低く、災害・基金・伝染病などに対しても平和時においても生命の危機があるという事は、社会的に観察できる現象である。わが国でも貧困と疾病、貧困と道徳的退廃との関連で、売春・犯罪・自殺などの悪徳、あるいは反社会的な行為へと走る。貧困は人間の健康や知能や社会的態度に及ぼす破壊的な影響があった。問題は、いかにして彼らに最低の生活を与えるかである。いかにして国民に健康な生活を保障するか。いかにして最低でいいが生きて行ける道を拓くべきか、先立つ基本問題である。憲法25条における人々の健康に関する規定と社会保障制度は国民一人一人の責務であると同時に国が担うべき責務である。

健康の概念を考えた場合、社会的に不具合は不健康であり、福祉と健康との関係からいえば貧困対策が重要な課題と言える。日本における貧困の問題は当然のことながら、力のない女性達の肩に重くのしかかり、個々の生活の中で、売春は、家族の窮乏を救う一つの方法であったろう。貧困は日本国に宿った病弊であり、その病弊の治療は国家が担うべき責務であったが、その治療を“かいた婦人の村”が担ったのである。そして、納骨堂に設置された小さなパイプオルガンの音色は、死しても尚受け取り手のなかった個人の霊を癒したことであろう。

## ■ おわりに

本論は、わが国におけるドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成の歴史とその活動の第二の報告である。ベテスダ“母の家”と“かいた婦人の村”について、その創立者である深津の生涯と思想を検証、その活動におけるキリスト教的愛の精神と、その精神から実践した女性保護活動について論じ

た。深津の生涯の探求は、底辺の点の発見であり、深津の生涯はその発見の中で、これ以上落ちるところはないところまで落ちた女性達の更生に身を捧げた一生であった。その思想にはキリスト教牧師として、みんなが見落としている低点志向である。貧困が売春を、売春が心身を傷つけ枯渇し、起き上がれないほどに沈んでしまう。その底辺まで沈んで疲れた人に休息を与えて、枯渇している人に水を与え、忘れかけた愛の精神を充足させるという精神に満ち溢れていた。場合によっては教育を受けるべき幼児期の頃から教育も受けられずに遊郭という閉鎖的な場所に閉じ込められた女性達も存在したであろう。彼女たちの受けた傷は大きく、生涯克服できずに、何らかの意味で知・情・意に障害を持っていたという事も考えられる。“かにた婦人の村”の入所者たちは苦情、脱走、拒食、暴力、自殺未遂、発狂など気の狂いそうな状況を呈し、職員も入所者も相互に疲れ果てるという状況であった。にも関わらず、深津の活動に賛同したディアコニッセや多くの者達の共同と忍耐と継続性があったなし得た女性保護活動であった。深津牧師は、そうした人間をもとの姿に引き戻すには、疲れた人に休息を与えて、枯渇している人に水を与え、忘れかけた愛の精神を充足させると考えた。そして、人間には、生まれてから死ぬまで何かしてやりたいという創造欲があると考えた。

一定の社会階層の中でどの程度が貧乏と言えるのかの課題はあるが、貧乏が様々な生活上の障害（犯罪・疾病・家族崩壊）を引き起こすと同時に、自身の日常生活の乱れは新たな病気を生み出すという結果になる。ここには個人に必要な生存に関わる問題が存在する。キリスト教がいかに犠牲的精神を有すると言っても、浜松における長谷川の結核患者収容や高齢者福祉活動も含め、ベテスタ奉仕女“母の家”が、わが国の福祉活動に貢献した役割は大きい。今日、豊かになった日本において、売春の問題が消えたかというところでもない。“売春防止法”が他方では、自由な恋愛の形として表出された結果、普通的女性達にその牙が向けられ、男性の性のはげ口になったと考える諸氏もあろう。彼らは在娼論者であると推測できるが、今日に至っても、売春問題が根底に横たわっていると考えるの発言であると考えられる。結果、望まぬ妊娠の傷は女性達のみが受ける。にも関わらず、女性達の中にも勤労を欲せず、物欲にとらわれた者達が、安易に金銭を得て衣食住でより豊かでありたいと欲しがると、その感情は男女の区別がなく、性犯罪や、性病などと様々な形で社会問題化される。国民の健康に寄与すべき看護職は、そうした社会問題に対して敏感になり、自身の問題同様、解決に向けた取り組みを行っていくべきである。

## 注

- 1) 佐々木秀美著：ドイツにおけるディアコニッセ養成がナイチンゲールに与えた影響について，看護学統合研究 Vol.19, No.1, pp.10-21, 2017年.
- 2) 佐々木秀美著：わが国におけるドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成の歴史，看護学統合研究 Vol.19, No.2, pp.33-49, 2018年.
- 3) 深津文雄著：ぼくの自画像，日本基督教団出版会，1981年.
- 4) 深津文雄著：いと小さく貧しき者に，かにた出版部，p.185, 1985年.
- 5) 深津春子著：かにた物語，かにた後援会，1998年.
- 6) かにた婦人の村編：かにた婦人の村創立50周年記念誌，社会福祉法人ベテスタ奉仕女“母の家”，2015年.
- 7) 深津文雄：沈黙を破って，かにた便り，No.1, No.7, No.12, No.13, No.14, No.22, 1975年.
- 8) 大濱徹他著：女子学院の歴史，同成社，p.250, 1985年.
- 9) 深津文雄著：前掲書3)，p.229
- 10) 深津文雄著：前掲書4)，p.185.
- 11) 深津文雄著：沈黙を破って，かにた便り，No.1, 1975年.
- 12) 深津文雄著：前掲書4).
- 13) 深津文雄著：貨幣からの脱出，かにた便り，No.12, 1976年.
- 14) 深津文雄著：大きいということが良いことか？，かにた便り，No.7, 1976年.
- 15) 深津文雄編：ディアコニ No.1, pp.19-21, 1954年，6月.

- 16) 深津文雄編：ディアコニ No.2, pp.19, 1954年, 8月.
- 17) 深津文雄編：ディアコニ No.3, p.10, 1954年, 10月.
- 18) 深津文雄編：ディアコニ No.5, pp.9-11, 1955年, 2月.
- 19) 深津文雄編：ディアコニ No.6, p.21, 1955年, 4月.
- 20) エリザベト・フォーリンガー：キリストの愛を運んだ人々 5 ゲルトレート・ライヒャルト, ディアコニ No.5, pp.9-11, 1955年.
- 21) 天羽道子著：コロニーとして誕生したかにた婦人の村, 特定非営利活動法人 (NPO) 安房文化遺産フォーラム論文.
- 22) 深津文雄著：前掲書 4), p.170.
- 23) 深津文雄著：前掲書 4), p.171.
- 24) かにた婦人の村編：前掲書 6).
- 25) 深津文雄著：続貨幣からの脱出, かにた便り, No.13, 1976年.
- 26) 深津文雄著：続続貨幣からの脱出, かにた便り, No.14, 1976年.
- 27) 深津文雄著：貨幣からの脱出, かにた便り, No.12, 1976年.
- 28) かにた婦人の村編：前掲書 6), p.112.
- 29) かにた婦人の村編：前掲書 6), p.112.
- 30) 深津文雄：ディアコニアの原点①, p.4-5, ディアコニア283, 2015年7月.
- 31) 深津文雄著：前掲書 4), p.185.
- 32) 出典：フリー百科事典 ウィキペディア (Wikipedia)
- 33) 女性史総合研究会編：日本女性史, 第2巻, 中世, 東京大学出版会, 1994年.
- 34) 脇田春子他著：日本女性史, 吉川弘文館, 1995年.
- 35) 女性史総合研究会編：日本女性史, 第3巻, 近世, 東京大学出版会, 1990年.
- 36) 女性史総合研究会編：日本女性史, 第4巻, 近代, 東京大学出版会, 1994年.
- 37) 女性史総合研究会編：日本女性史, 第5巻, 現代, 東京大学出版会, 1990年.
- 38) 出典：フリー百科事典 ウィキペディア (Wikipedia).